
Dance with the Abyss

蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a n c e w i t h t h e A b y s s

【Nコード】

N 3 9 9 6 A

【作者名】

蒼月

【あらすじ】

最凶最悪と謳われるアリス・レーディンが、平然とした顔で、今日もパシらせているのはなんと契約内容を誤魔化された悪魔……！
！人間&悪魔&天使&神の思惑が入り交じる世界で繰り広げられる、武器と魔法のバトルファンタジー。

—プロローグ—

（ねえ、ジルツ。やっとこの世界ミドガルドに来ることができたよ。……フフ、《システム》にもやはり穴はあったんだよ。

あなたを…まだ復活させられる。あなたの《核》を持ち出すことができたから…。）

銀髪の彼女は目を閉じて微笑んでいた。積年の思いが一つ叶ったのだ。

ルルイエ ヘルバス 天界と魔界との境目にある世界、それが地上界ミドガルド、ここは様々な生き物と情報が入り交じる世界なのだ。

天使や神はミドガルドまで割と楽に干渉できるのだが、悪魔は本来召喚という形でしか干渉できない、だから悪魔と言う存在の彼女は喜んでいたのである。

（あなたを殺した憎くて堪らないアイツを八つ裂きにしてあげるから。）

彼女はゆつくりと瞼まぶたを開いてゆく。血の様に紅い双眼には、淡く輝く満月が映り込んでいた。

—1、契約完了—

淡く輝く満月の下に彼女たちはいた。

「出来るのか出来ないのかこっちは聞いてるんだけどなあ…」

威圧感と殺意がみなぎる彼女は、魔縫銃まほうじゅうの銃口を彼——上級悪魔アラのこめかみに突き付けながらガンくれる。

たとえ死なくとも、頭部を吹き飛ばされれば再生するのには時間が掛かる。…せっかちそうなの女なら、悪魔を屁とも思わない彼女ならば、きっとアラを殺すだろう。面倒くささと、不穏な空気に押されてしぶしぶアラは同意する。

「分かった、契約しよう。…その前に契約対価を提示しておくよ？契約に関することは後々改算できな…」

「早く言いな」

チャコツと言う音と共に魔縫銃のトリガーが引かれ、アラの額に冷や汗が流れる。

…気を取り直し契約続行をする二人。

「ハハ…えと…汝の体が朽ち果てるとき、汝が魂を我に占有させることを此処に誓え…」

「誓うよ」

あらかたの意味は分かっているのか、矢継ぎ早に答えるアリス。

尚も契約は続く。

「我が魂の依り代を汝はいずこへと定める？」

悪魔は依り代を定めなければ魂が不安定になり、不安定になれば魔力の放出がうまく行かなくなる。ただ、依り代との共通項が多ければ多いほど力は強くなる。それだけ現世では不安定な存在なのだ。そんな意図を含む質問に、彼女はすでに答えを用意していた。

「この魔縫銃」
アイフリット

ゆってから、銃口を静かに放し自分の胸の前で揭示する。

「う、了解した。契約の書に血の契りを…」

アリスは親指の腹を軽く噛み切り血を滲ませる。そして契約の書に押印した。それと同時に、銃に込められた魔力の波とアラの魔力の波がシンクロして、アラが銃に宿る。

「契約終了だね」

アラは呑気に銃のカッコで話しかける。

「ああ、終わりだな。よろしくな」

「うん」

うっし、銃弾の制限は無くなった、という小言はアラには聞こえず空中に霧散して行った…。

―2、バジリスクと謎の玉―

「暑い…なにさこの暑さ……尋常じゃないわ…魔縫術を使おうにも…集中できないじゃない」

目的の、水都アシオスを目指し砂漠地帯を歩く二人。最凶最悪と謳われ、悪魔とも流布されるアリスでさえも熱波にはめっぽう弱かった。

「…人間て大変だね♪暑さとか寒さとか感じるんだもんね。悪魔の僕はかんじなぐはっ！」

挑発的な言葉の返事代わり、アリスは前を歩くアラにイライラ混じりのハイキックをお見舞いした。

見事、側頭葉ヒットである。いつもより威力はでなかった…でなかったが、一般人に比べればこの状態でも威力がある事は確かかなようだ。現に、アラは横にぶっ飛び頭から砂地に着地、見事悪魔の体の墓標である

「うるっさいわね……アンタ勘に触るのよ…大体主であるこの私を、介抱する気はないの？」

怒気を含む瞳でアラを睨み付ける。

「…ごめんなさい、じゃあ冷風の魔縫術を」

アラは手早く呪文を唱え、

効果範囲をアリスの周囲に設定、発動する。

「はゝ、生き返るわゝ」

「オッサン臭い発言はやめてくださがっ！」

アラの横腹部を蹴撃が襲い、綺麗なアーチ上を描く。そんなドツキ漫才中でも、めざとく数キロ先に目的地を見つけたのは、悪魔のタフネスさから来る余裕と抜群にいい視力のおかげだった。

「よっ、と。」

今度は高さがあったせいかな両足で着地である。

「あと少しでアシオスですよ。」

「へえ：アンタ目がいいのね……………そんなに近付いたんなら奴に気をつけなきゃね」

「奴？」

アラはその存在について尋ねて見た。

「知らない？アシオスの周りをうろつく、旅人を襲う邪眼の大トカゲ『バジリスク』を」

アラの額に冷や汗が流れるのをアリスは見逃さなかった。

「え、勘弁してよ。いくら僕が悪魔でも：爬虫類は嫌いなんだから……」

若干ビビりながら尚も歩みは止まらない。

…まあ、実質的にアラは強いし、何よりも戦ってくれる人がいるからだが。

その後、歩きながら食べ物の話をして、何故かアラが殴られたその時不意に音が聞こえた。

ズゴゴゴゴゴ……

微かな地鳴りの音が段々近付いて来る。

アリスは臨戦態勢を取り、アラは銃の姿に戻りアリスの手中に収まる。

砂が吹き出し、巨躯がしなやかに白日の下に躍り出る。

バジリスクは蛇が威嚇するような雄叫びをあげた。

邪眼はいまだ硬く閉じられているが、アリスの気配を感じとり対峙する。

アリスは銃身にキスをしながら集中し、手早く呪文を唱える

「凍える息吹よ、宿りし力を糧とし二つの形を成せ」

バジリスクは尻尾でアリスを薙払おうとするが、アリスはそれを横っ飛びで回避。着地の瞬間、バジリスクの目を狙いトリガーを引く。

ビシッ！ビシッ！

両目を凍結されたバジリスクは微塵も動じず、

自分に向けられる殺意を辿りアリスの元へ突進して来る。

「!？」

紙一重で避けたかに見えたが、微妙に逆立った硬い鱗で浅く肌を切る。

「フン…女の肌を傷つけるなんてなかなか罪な事するじゃない？」

だがそう言う彼女は嬉しそうである。

「いくわよ？」

アリスの姿がかき消えて、僅かながらバジリスクに動揺が走る。だが周りを跳び回っている事を確認した後『毒の息吹』を散布する。

「……フフ甘い甘い！もう、練乳をかけて砂糖をかけてミルクをかけた…イチゴ並みに！」

刹那、水と雷で構成された刃がバジリスクを切り刻む…！どうやら攪乱している最中に呪文を詠唱していたらしい。

ちなみにバジリスクは“砂”と“毒粉”で構成された魔物であり、死すればまたその二つに戻ってゆく。そして、また別の場所で生まれ変わるのだ。間違ってもスプラッターな光景はなかった。…通常は何も残ることはない。

『…？ねえアリス。そこに転がっているものは何さ。』

アリスは、視線を足下に移してそれを摘みあげる。

「なんだろう？なんかビー玉みたいだけど…」

直径2センチくらい、材質は硬質なのに中身は不思議と胎動していた。

「もしかして…ゲット？」

『バジリスクの腹の中から？』

「お宝を？」

……………。

しばらくの間静寂が二人を襲う。

『「お宝ゲットー！」』

二人の快活な声が青空に響く。いくら音量に自信のある二人でも、さすがにアシオスまでは届かなかった。

― 3、シスター・メロウ

水都アシオスのど真ん中にある、噴水の側のベンチにアリスは堂々と社長座りなどをしながら、甘ーくアラに囁く。

「ア・ラ…ちょっと頼みごとが…♪」

赤面しながらアラは近付いて行く。…まあ、そりゃそうだろう。こんな場所で妖しい響きの声を放つ連れなど、恥ずかしいことこの上ない。

「な…なに？早く言ってよ…」

アラが答えを求めた瞬間、アリスの顔と声が豹変する。

「…仕事を探してきなさいよ。」

なんだお金の事か、と思いアラは溜め息を一つ。

「お金なんて…盗賊団を襲えばいいんじゃない？」

悪魔のアラは、サラッと人外な発言をするが（存在的にはもともと悪魔です）…

「馬鹿ね。盗賊団に困ってる人の依頼を受けて、それから盗賊のお宝を奪い、見事壊滅。お宝ゲットで報酬もゲット…あわよくば、盗賊壊滅のことを国王に申請してさらに報酬ゲット！」

：ミもフタもない言い方、プラスアルファまで狙うアリスがアラ以上に悪魔に見えた瞬間である。まあ、アラは上級悪魔の癖に妙に弱弱しく見えるのだが、それは仕方のないことだった。最凶最悪と謳われる彼女の戦歴と、彼女のバトルスタイルは伊達ではないのである。：ていうかあんたら全うな仕事をしろ、という話である。

「時代は、一石で幾数の鳥を打ち落とす精神なのっ！」

とうとう、訳のわからんこと言い出すアリスに困惑し、：とうとうアラは折れた。トリッキーな口攻撃にK・O。負けである。どこからともなく、ファイト・ベルのカンカンカンカーンという音が聞こえたような気がした。

「：ひとつ聞きたいんだけど、何で僕が行くのさ？第一悪魔をパシらせるなんて前代未聞なんだけど」

「あんたが行けば一石四鳥なの」

もはや、自ら動こうという気はサラサラないようである。

「さーあ早く行きなさい！」

「はいはい。んじゃ行ってくる！」

タッタッタッタッタ：

ドンッ！

勢いよく駆けていったアラは、黒と白のコントラスが映える修道服を着た女にぶつかり地面に突っ伏す。…対する女は、足腰が強いのか微動だにせずにいる。

「す…すみません!! 私が前をみていなかったために」

そんな事を言いながらも、彼女は落ちた本を拾っている。

「…ま、そんなことはいいけどさ………あ♪」

なにやらアラはいいことを思い付いたらしい。

「…なんででしょうか？」

と、問いながらもなお手は止まらない。…なかなかいい性格をした女である。

「ねえ、なんか困ってる事ない？ 僕ら仕事を探してるんだけどさあ」

言った矢先、彼女の顔はパァッと明るくなる。

「え……そうなんですか？ では、早速ですが…」

彼女が拾い集めた本の中から一枚の紙を取り出そうとしたその時、アラは口を挟む。

「まって。連れがいるから噴水の所まで戻っていい？」

「ええ、いいですよ。…さあ行きましょう！」

「え？あ？ちよっとちよっと！あんた行動が早いねつつっ！」

ズザザザザザ…！

抵抗は空しく、アラは腕を引っ掴まれる。女は人を掻き分け掻き分けしながらグングンと突き進んで行く。

「お連れさんはどこですかっ!？」

女は、噴水近くでキョロキョロしながらアラの連れを探す。

「アラ、何ズタボロになってんのよ」

ふいに、女性の後ろからアリスが現れた。女の顔が一瞬固まる。がすぐにほころび…

「あなた…あの真紅の魔縫銃、アイフリットの持ち主…アリサ・ルーデインですね？」

……………。

妙な沈黙と共に、思わず目が点になるアリス。世界に知れ渡るアリスの名前を、ニアピンで間違えるところがそよ風を誘う。そのくせ銃の方は間違いがない。

「悪名高いアリス様の名前を間違うとは！…アラ…！あんたも何か言いなさい！」

「馬鹿だな。自分で悪名高いって認めるのかぶっ！」

アラが地面にキスをした。脳天直下のかかと落としである。

「黙りなさい」

完全に矛盾であり会話さえもおかしい。女はそんな一連の行動を見届けて…

「あの…お仕事持って来たんですけど」

マイペースな一言にアリスはぴたりと止まる。

「申し遅れました。私、アクエリウス修道院のシスター、メロウ・ナティウスであります」

4、―インターロード―

彼女はきらびやかなバスターソードを携えて、世界中に張り巡らされた巨大な魔縫陣、『ノアズ・シップ』の十方結界点の一つに向かい、軽やかに空を翔んでいた。

彼女が目指してるのは『水縫点』と呼ばれる十ある世界構築元素の一つ、“水”を紡ぎ出す場所であった。

事は性急しているらしく彼女はスピードアップの魔縫術を詠唱する。

「音よ、風よ、大気を震わせ速さを紡げ！」

大気は縮小し、風を収束させる。

キイイイイ！！

僅かに、微かに空間が軋んで彼女の背中に魔縫陣を紡ぎだす

「バースティング！」

ピタリと音がやみ、一瞬だけ静寂が辺りを包む。僅かな沈黙の後、圧縮された膨大なる量の風が弾けた――

バグウウウウン！！！！

彼女は風の勢いに乗り、更に速度を上げる。

どれだけ海上を翔んだだろうか、

地図上には記載されていない場所に彼女はきらびやかな魔縫陣を見つける。

「これが水縫点ね？」

使命感に燃える瞳で見つめながら、彼女はバスターソードを天高く掲げ力ある言葉を解き放つ

「優しき水よ、凍て付く息吹よ今こそ汝が力を示せ」

パシユツツ!!

魔縫陣の中央に剣が穿たれて、その状態のまま、陣が硬直する。

「…ふう、どうやら一段階終了ね」

一言呟き、青く穏やかな空を見上げる。嵐の前の静けさとでもいうのであろう。運命の歯車はゆっくりと、しかし確実に噛み合い始めた……………

―5、依頼内容―

場所はうつり、三人はお洒落なカフェへ足を運んでいた。このカフェのテラスから見える景色がアシオスの三大おすすめスポットの一つらしく、メロウのご希望に添えてここに移動したのだった。

「ん、私はオレンジジュースで。」

はい、と頷くウェイトレスの声。

「うわ、似合わないオレンジジュースとかうがぁ！」

刹那、隣りに座っているアラの顔に裏拳が炸裂し鼻から血が流れている。

威力はあったもののインパクト時に少しタイミングをずらしたらしく大事には至らない。

「あ…私はトマトジュースをお願いします」

…どうやら鼻血を見て決めたらしい。

「あんたらアリエナイ。普通に殴るわ、結果をみても動じないわ…
…僕はブラックコーヒーで」

各々が頼み終え、ドリンクが無事手元に届いた事を確認しながらアリスはメロウにたずねる。

「…で、私たちに何をして欲しいの？
…私怨からくる殺害依頼はうけないけどね」

にやり、と笑って話すアリスのその言葉に、軽く目尻をつり上げ
メロウは即座に反応を示す。

「仮にもアクエリウスに使える者…殺しは依頼しません！そんなモノは自分で…！」

『！！』

アラとアリスは硬直する。

「…自分で殺るワケ？ヤル事過激だな」

「あ…う…！依頼のと言いますね…！」

珍しく強制的に話をかたつけるメロウに、従いの意をしめすアリスとアラ。

「単刀直入にいいいます。フロストレイドと言う剣を、盗んだ連中から取り返して欲しいのです！」

「フロストレイドって、凍竜の牙から作り出したっていうヤツ？」

今に至ったことではないが、アラが話に横入りしてくる。

アリスは思わず（条件反射で）殴りそうになったが思いとどまる。
いつになくアラの顔が真剣そのものだったからだ。

「ええ、そうですけど？…どうかされたんですか？」

「…うん。実は吸血鬼が氷の力を手に入れたって言う話を前に聞いてね…その話が3ヵ月まえかな？」

「！！…奪われた時期といっしょです！！」

「一回手にしたことがあるし、まずは魔力の波長で探してみるよ」

「ありがとうございます！」

こうして、三人は今一度ここにと止まることになった。

…アラは目をつぶり頭の中に魔力を練り上げる。

そして、亜空間にアクセスし覚えている魔力パターンをもとにそれを探し出す。Sクラス悪魔の片鱗が見えた気がしたのはきのせいではないだろう。

……………。

ちょうど三杯目のオレンジジュースをのみ終えたとき、アラは不意に目を開けた。

「見つけた！！あの空間座標は確か…夢幻の森の最奥部だ。なぜそんなところに？」

「私もサッパリわからないんですが…」

二人が首を傾げている間にズビズビツ！とジュースを飲み切り、アラが飲み残してたコーヒーを飲み込みアリスはいう。

「ま、当面の目的ができたからいいじゃないか。どうあれまずは夢幻の森にいくしかないし」

「そうですね♪では行きましょう！夢幻の森へ！」

―6、夢幻の森「ミーツ・ヴァムピル」―

夢幻の森、分かりやすく言えば迷いの森である。多々ある磁壊石により羅針盤コンパスが狂わされる場所であるが、真に厄介なのはもつと別のところにあったりするのだ。

「……アリスさんアリスさん、この花きふえいだとおほひはへん？
うふふ♪」

目がとろんとして呂律が回らなくなったメロウが差し出すは、絶え間なく色に変化する不思議な花である。それを見たアリスは溜め息を漏らした。

「…警告する前に早速ですか。」

アラを銃の姿にさせて、バシユウウウという小気味良い音と共にアリスは手近にある花を焼却していく。一段落ついた頃、アラが口を開いた。

『僕が初めて来た頃と様子が違うけど…一体さっきの花なんなのさ？』

「ああ、あれは灯幻花といってその花粉を吸えば幻覚が頭ン中に投射されてしまうワケ。それで道が分かんなくなる。だから夢幻の森なのよ」

アリスは説明しながら罨にかかって虚ろなメロウの解毒作業にとりかかる。

パシュン！

空気が抜ける様な音と共にメロウが1m吹っ飛んだ。

「うう…痛いじゃないですか。」

メロウの目尻にうつすら涙が浮かんでいることからして衝撃は少なからずもあったのであろう。

「痛いも何も勝手なことをされちゃ困るんだよね。だいたいフロストレイドを探しに来たんじゃなかったっけ？」

軽め怒気をはらんだアリスの声にビビりながらもアラが唐突にしゃべりかける。

『お二人さん、その話は置いて話を聞いて。なんだか血の気配がするんですけど』

「血の気配？あはは、まさかヴァムピル？（笑）」

『ほおう、よく気付いたな。』

ヴァムピル。いわゆる吸血鬼と呼ばれる魔の眷属であり人間の貴族の魂の成れの果てでもあるが、性格はというとピンからキリまで

様々である。

「まさか…あいつか？」

『なに？知り合いなわけ？』

「まあね…過去に一回私に喧嘩を売って来たヴァムピルが…！」

タタタタタン！

言い終わる前に無数の針がアリスのいた場所を貫いていたがアリスは余裕で攻撃を避けていた。薄ら暗いこの森のなかでその針はどす黒い赤の色をはなっていた。

「…違う、あいつじゃない…。…ふーん。元貴族の成れの果てはこすい戦法しかとれないチキン野郎なのかな？」

挑発としかとれない発言をポロリ、というかさらり、と流す。

『クロウリーの末裔の私を愚弄するとは…なかなかイイ度胸だな。』

どこからともなく声が森に響く。そして同時に数多のコウモリがどこからともなく現れて、人型を形成してゆく。人ではない、在らざる者が姿を現す。

「ククク、我が名こそはネレイスター・ゼッシュ・クロウリー。天才魔術師、アレイスター・クロウリーの正統血縁者なのだよ！」

「…ぶぷっ！ゼッシュだって（爆笑）Zesh、Z、…駄目だ笑いがとまんない（涙目）」

「グ…！」

ネレイスターが若干反応する。魔の眷属にとって実力こそ絶対だからだ。

「……………ああ、Zって家系の中で最弱を表わすんですね。…クス。」

天使の様な顔で、なかなかヒドイことをにべもなく、さらっと。

『……………ネレイスター・ゼツシュ・クロウリー?? そんな奴いたんだ』

上級悪魔のトドメの一言である。

「…く、うるさい！ 最弱といえど、ヴァムピルの中での話！！ たかが人間の雌ごときに遅れはとらん！！！」

タンッ！

「ハイ、残念♪ 紅の魔縫術士に雑魚は勝てない。それが摂理よ。」

すでに接近したアリスはトリガーに指をかけながら、銃口をネレイスターの額に強く押し当てる。

「…なに…? お前はデュロを倒したあ…」

彼女は、“力”を解き放つ。

「『グッバイ♪…アツシュ・フォイア!!』」

』

パンッ！という乾いた音と共に、彼は灰塵に帰した。

17、夢幻の森「異変」1

(…最弱といえど仮にも“クロウリー”直系の血筋を持つヴァムピルを倒すとは…)

彼女は気配を殺しながら木々の中にじっと身を潜め、事の成り行きを見守っていた。

(ふふ、あのこもなかなかいい感じに“育って”いるじゃないか。

“餌”を与えればさらに強くなりそうだな…ふむ、次は

「あっち」

の様子でも見にいつてみるか)

ヒラリ、と身を翻して音も無く彼女は虚空に消え失せる。

「…………あれ???何か感覚が一瞬おかしかったんだけど…………なぜだ?」

「そりゃあ、アリスの感覚基盤自体がバグっているからだと思わががっはあ!!」

いつのまにか本来の形に戻っていたアラに、中段蹴りから派生する上段蹴りの二連コンボが炸裂する。…………どうやら今回は、パワーブースト系の魔縫術が片足にかけられていたらしく、アラの頭が巨木にめりこんでいた。

「な!？」

何を仰るんですかー!と、アリスの顔はみるみる朱が差していく。茹でダコという表現がピッタリだ。

どうやらこの二人の純粋さは、外見と真逆であるらしい。

「私も攻めるほうが好きですのでおきになさらず♪。」

全てを癒すほどの満面の笑みで、メロウはテポドン並に威力ある発言をする。

「ささ…さあ♪フロストレイドを探しにいこうよ」

アリスの胸中を察してか、アラは無理矢理気味に話題修正をするが…

「ヲイ、コラ。事の発端はあんたなんだが？」

怒気を孕んだ笑顔。力強くグッと握り締めた拳は、すでに標的をロックオンしている。どうあがいても逃げることは不可能である。

「うあ、ごめ……………?」

思わずアラの体が硬直し防御態勢にはいる、だがいつまでたっても攻撃はこない。気付けばアリスとメロウの視線は、森の中央部に向いていた。

「ん……………いったい何が…?」

アラも二人と同じ方角に視線をむける

「へ……何がどうなって……」

そこには、明々と照らされている……否、紅く激しく燃え上がる、
全てを見下ろすほどの巨大な塔がそびえたっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3996a/>

Dance with the Abyss

2010年10月9日22時23分発行